

## 26 建国大学その2

私の建国大学への赴任の経緯については、すでに述べたが、それが私にとって如何なる「天意」であったかは、複雑かつ深刻にして、この叙述は真に容易なことではない。よって以下、事件の推移展開に伴って述べるつもりである。されば建国大学がいかなる学校であったか、その概略については予め述べておく必要がある。

まず第一にその場所は、首都であった新京南方郊外の南嶺と称する高台にあって、厩大三十万坪の広さがあったが、そこには宏大なる農場もあった。校舎は平凡なものであつたが、他に塾舎があつて、そこには五族融和の建前で、学生たちが(1)日系、(2)漢民族、(3)韓民族、(4)蒙古族、(5)最後に白系露人の若干を容れた人員構成であつた。このような試みは、白色人種のいずれの国の植民地にも、全くその類を見られないことであろう。いわんや、聞くところによれば、この建国という破天荒なる計画を樹てたのは、実に三人の俊秀なる参謀であつて、その一人は例の辻正信参謀であつたことである。即ちそこには、たとえ軍人であつても卓抜なる士となれば、西歐的な個人主義観を超えた世界観の保持者があつた故であろう。

では、建国大学そのものに付いてはどうかというと、建学の根本方針そのものは、上述のように比類ない卓抜なるものであつたが、現実としては如何というに、学生たち自身はまだ少青年にして、おまけに上述の如く、比較的公平なる按分比例によって入学して、同一寄宿舎にて共同の生活であつたが故に、小さな小ぜり合ひは勿論あつたが、学校当局を煩わすような問題はかつて一度として無かつたのである。それというのも、塾頭の中こは豪放磊落なる東洋的豪傑が多くて、さばけた人々が多かつた故であろう。

然るに、ひとたび教官陣となるとそうはゆかず、いわゆる「学者」と呼ばれる人々に多く見られる、陰湿なる派閥的な確執の免れざる弊があつたのは事実である。その上建国大学には、實力はあつたが、とかく一癖があつて、内地ではともすれば實力相応の地位を恵まれなかつた人々が多く集まつたが故、ともすれば如上の傾向を免れ得なかつた。

そしてそれは、二十数名の漢民族系の学生が延安に去た赤化事件の為、作田先生がその責を負つて副総長を辞せられた。その代りに退役の陸軍将官が後任として着任した以後は、作田先生の時代に蔭になっていた人々が、学問というものの分からぬ軍人総長になってより、陽の目を多く見るに至つたのは、これ現実界に免れ得ぬことであろうと思う。但し建大設立の意義は、最近数回にわたつて彼我の同級生間に往来が行われて、まさに「神天」によりて証明されたといつて良いだらう。